

★タイ環境学習キャンプの記録その1 中込貴芳（自然文化誌研究会副代表理事）

タイの環境教育キャンプは、1998年、INCHとタイ、ラジャバト・プラナコン大学の環境教育学科の合同キャンプとして始まりました。その後、チェンマイやチュンポン、カンチャナブリなどにあるタイ各地の国立公園などで環境問題や環境教育の現状について共同で学習し交流を続ける中で、ここ数年は、バンコクから北西に4時間あまり行ったところにあるウタイタニ県バンライでキャンプを実施しています。このバンライという町は、世界遺産に登録されているファイカケン野生動物保護区に隣接し、周辺にはタイの少数民族であるカレン族やラオ族の集落があり、タイの野生動物や文化を学ぶには絶好の立地条件にあります。ここで、私たちは、かつてタイのこの地区のWWFで活動し、その撤退に伴って、この地に残って環境教育の普及活動を続けているシリポン氏と知り合いになりました。彼は自ら、その地域の様々な植物を移植し、バンガローや、集会場のあるパンダキャンプと呼ぶ施設を作り、環境学習を実践しています。私たちは、このパンダキャンプを拠点に、毎年8月に日本から環境教育に興味のある教員、社会人、学生を集め環境教育キャンプを企画しています。以下は2009年度に実施されたキャンプについての具体的な報告です。



大学の学食でタイの先生と

2009年のキャンプは、8月15日から23日までの9日間の日程で行われました。参加者は、学生4人、教員3人、スタッフ2人、子供1名そして、私たちのキャンプの最大の協力者-タイの大学で日本語を

教えている日本人の先生1名の総勢11人です。

初日のバンコクの宿泊先は、グランドビューホテル。ずっと交流を続けてきたラジャバト・プラナコン大学内にあります。ドンムアン空港に代わって2006年に開港したバンコク・スワンナプーム国際空港から車で約1時間の距離にあります（ドンムアン空港からはたった15分だったのに！）。いつもバンコクでは、お付き合いをしている大学の先生方が温かく迎えてくれます。今回は、夕食をタイの第一の大河-チャオプラヤー川のほとりのレストランで川面に映る夕日を眺めながらご一緒しました。



ウタイタニでのリバークルーズしながらの昼食

翌日は、バンライに向けて運転手付のワゴン車に乗って出発です。バンコクでの朝食はいつも大学構内で朝早くからやっている屋台風の学食で済ませます。テーブルが並べられた大きな屋根付きの吹き抜け広間の端に屋台風の出店が立ち並び、そこから料理を選んで食べます。麺類からご飯まで、いろいろな種類のタイ料理が1食30バーツ（90円）くらいのリーズナブルな値段で食べることができ、本当の庶民の味（うまい）を味わうにはもってこいの場所です。バンコクを出発すると、バンライから迎えに来たワゴン車は、途中必ずロータス（スーパーマーケット）寄ってもらいます。ここでの目的はサンダルや衣類や食料などキャンプの必需品の買い出しです。特に、ビールの購入は忘れてなりません！今回はバンライまで、ウタイタニ経由で行きました。昼食は、船に乗って河を下りながら食べました。あ

つい日差しが照りつける真昼の静かな川面を船は滑るように走っていきます。船からは川に沿って建つ民家が見え、この地方の人々の生活の様子をうかがい知ることが出来ます。昼食後、近くの大きな崇拝を集める大寺院を見学し、市場を見学しました。市場は、その土地の人々の生活ぶりを知るのにはもっともよい場所です。この市場では、川に面しているだけあって淡水の魚介類の種類の多さに驚かされます。

夕方、車はバンライのパンダキャンプに到着しました。シリポン氏やその家族など懐かしい人の再会です。パンダキャンプは、訪れるたびに拡張され様子が変わっています。植えられた植物はどんどん大きくなり、キャンプの中を流れる小川は毎年流れを変えています。私たちが泊まるのは、小川を渡った、広場の端にある竹製のバンガローです。この施設も2~3年前にできました。すぐ近くに大きなイチジク（ピグツリー）の木のあるとても落ち着く場所です。シリポン氏は私たちが到着するといつも、パンダキャンプを巡り植えられている木について熱心に説明してくれます。このキャンプには、有用ないろいろな植物が移植されていて、カレン族やラオ族を始めとするこの地方の人々がどのように植物と関わり利用してきたかがい知ることが出来ます。実際にこのキャンプでは地元の子供たちがそうした失われつつある植物に関する知恵を学んだりする活動を行っています。



このキャンプでの生活はとてもゆったり時が流れ快適です。熱帯なので昼間はたしかに暑いですが、

夜は標高があるせいもあって意外に涼しく過ごしやすいです。食事は、川の手前にある厨房施設のある東屋風の食堂施設でとります。いつも、料理人をやとっているの、ここでの食事はバラエティに富み、味も格別です。この日の夕食もここでとりました。その夜は、再会を喜びながらビールを酌み交わしました。

三日目からは、いよいよキャンプ本番です。ワゴン車に乗って、途中温泉に寄ってから、ファイ・カケン野生動物保護区の管理本部に向かいました。温泉は、大きなダム湖のほとりにあり、何棟かの浴槽の建物が建っていて、その建物を男女それぞれ一棟ずつ借り切って入浴します。ただ、平素は浴槽にはお湯が入っていないため、大きな浴槽にお湯がなかなか貯まらず、腹ばうようにして入りました。しかし、パンダキャンプでは、トイレの中の大きな桶に貯めた水を体にかけて汗を流すだけなので、硫黄分のある天然温泉の入浴は湯上がりもさっぱりして快適でした。保護区本部は、バンライから北に車で三時間ほどの距離にあり、キャンプ場や研究者の宿泊棟や集会場や研究や観察のためのネイチャートレイルが付属していて動物保護区の入り口にあたります。保護区は、タイの場合国立公園以上に動植物が重要な保護下に置かれているために、一般に広く開放されているというわけではなく、宿泊にも前もっての許可が必要で、私たち以外には、他に観光客はいません。この本部には、タイの自然保護運動の父ともいわれ、ファイ・カケン野生動物保護区の環境保全に尽力したスーブ・ナーカサティアンの銅像や研究棟が残されています。彼は、役人の不正や、権力者がその利権のために貧しい地域住民を雇い、森林を伐採したり、野生動物を密猟するようにし向けたりして、多くの野生動物が生息する豊かな森林が破壊されていくことを食い止めるために保護区と周辺との間にバッファゾーンを設けることを提唱するなど、その保護に努めました。しかしその最中、1990年に謎の自殺をしています。この保護区は、こうした活動の成果もあって1991年世界自然遺産に登録され、現在でもアジアゾウ、トラ、ヒョウなどの大型哺乳類や、クジャク、サイチョウなどの大型鳥類が数多く生息しています。